

小野小町変貌：説話から能へ

小田, 幸子

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

84

(開始ページ / Start Page)

21

(終了ページ / End Page)

28

(発行年 / Year)

2011-07

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010223>

〈論文〉

小野小町変貌

— 説話から能へ —

一、はじめに

平安時代前期の宮廷女流歌人で、六歌仙の一人として『古今和歌集』『仮名序』に名を連ねる小野小町の生涯は、多くの謎と伝説に彩られている。そもそも、実在の小町像が不鮮明なうえに、平安中期～末期に成立した空海作と伝える『玉造小町子壮衰書』の老女と小野小町が同一人物とみなされ、「落魄の小町像」が広く流布した。そこにさらに伝説が加わり、それらを総合して中世には「若い頃は絶世の美女で多くの男性に言い寄られたが、拒絶や翻弄を繰り返したあげく、年老いてからは願みる人もなくなり、乞食となって諸国を放浪した末に孤独のうち亡くなった。その骸骨は野ざらしとなっていたが、ある人が見つけて供養した」という一代記風の輪郭が形作られていたのである。

小田 幸子

伝説上の小町は、定まる男もついの住み家も財産も無く、あてどない人生を浮遊する老婆である。何も持たないが、「過去」だけはたっぷり持っている。能は、ごく早い段階において、この伝説的小町を主人公とする〈卒都婆小町〉と〈通小町〉を制作し、その後の成立と推定される〈関寺小町〉・〈鸚鵡小町〉・〈草紙洗小町〉（この作品のみ若い歌人小町が主人公）の計五番の能が現在まで演じ続けられている。非上演曲を含めれば作品数はもっと増え、内容も多彩である。同一人物がこれほど多くの作品に登場するのは希であり、小町を取り上げたことは能の作品史にとって大きな意味を持ったと思われるが、同時に、それ以降の小町像にも少なからぬ影響を及ぼした。なかでも、小町と四位の少将（深草少将）の結びつきを決定づけた点は特筆に値する。能があらたに付加した小町伝説と言ってよからう。本稿は、「過去の時間を背負った老女小町」の舞台化に焦点を当て、小町像の時代的変貌を追うことを目指す論考の一部で

ある。全体としては、〈卒都婆小町〉・〈通小町〉・〈関寺小町〉の三曲に關して、それぞれ小町説話との関わりを確認し、その攝取方法と能が新たに付け加えた要素、および劇としての特色をまとめ、さらに、能以降の展開——三島由紀夫作『近代能楽集』・『卒塔婆小町』と太田省吾作『小町風伝』をとりあげ、近現代演劇における小町像の新たな広がり、能の現代化について述べる予定であるが、その最初に当たたる本稿では、〈卒都婆小町〉と〈通小町〉について考察することとした。

二、小町説話の概要

小町説話の実態と形成については、片桐洋一氏『小野小町追跡』¹や細川涼一氏『女の中世——小野小町・巴・その他』所収「小野小町説話の展開」²をはじめ多くの論考がある。ひとくちに小町説話といつても、広汎にわたるうえ、細部における変容が著しいこともあって、伝承経路や影響関係を解明するのは困難を極める。そこで、ここでは、能以前に成立していた典型的な小町像を確認することから出発したい。直接的典拠というわけではないが、能の小町像と密接に係る説話として、建長六年（1254）成立、橘成季編纂の説話集『古今著聞集』巻五・和歌第六に記す「小野小町が杜衰の事」を以下に引用する。
 （新潮古典集成本による）

小野小町がわかくて色を好みし時、もてなしありさまたぐひなかりけり。「杜衰記」といふものには、三皇五帝の妃

も、漢王・周公の妻もいまだこのおごりをなさずと書きたり。かかれば、衣には錦繡のたぐひを重ね、食には海陸の珍をととのへ、身には蘭麝を薫じ、口には和歌を詠じて、よろづの男をばいやしくのみ思ひくたし、女御・后に心をかけたりしほどに、十七にて母をうしなひ、十九にて父におくれ、二十一にて兄にわかれ、二十三にて弟を先立てしかば、単孤無頼のひとり人になりて、たのむかたなかりきいみじかりつるさかえ日ごとにおとろへ、花やかなりし貌としどしにすたれつつ、心をかけたるたぐひも疎くのみなりしかば、家は破れて月ばかりむなしくすみ、庭はあれて蓬のみいたづらにしげし。かくまでなりければ、文屋康秀が三河の掾にて下りけるに誘はれて、
 侘びぬれば身をうきくさのねをたえてさそふ水あらばい
 なんとぞ思ふ
 とよみて、次第におちおれ行くほどに、はては野山にぞさ
 そらひける。人間の有様、これにて知るべし。

鎌倉期における小町説話の典型といつてよいだろう。要点を
 かいつまんで述べると、『玉造小町子杜衰書』の内容を小野小町
 の生涯とみなして同書を引用しながら栄華と零落を記述する
 こと、『古今和歌集』938番の小野小町の歌を、「かくまでな
 りにければ」（こんなひどい状態になってしまったので）とい
 う文脈で説話中に組み込んでいること、そして傍線部のように、
 小町零落の要因を「わかくて色を好み」・「よろづの男をばいや
 しくのみ思ひくたし」（すべての男性をとるに足らないと見下

し) たためとしてゐることの三点が重要と思われる。第三点は実は、原典の『玉造小町子壮衰書』の記述と微妙に食い違っている。同書では、並みの男との婚姻を許さなかつたのは両親と兄弟であつて小町自身ではない。小野小町と玉造小町を同一人物とみなす過程で、このような解釈が生まれたのであろうか。

『古今著聞集』が依拠したとみられる『十訓抄』第二では「可離驕慢事」と題することからもうかがえるように、小町零落と放浪は「若さと美貌に奢り、多くの男性を拒絶したため」という、因果応報の文脈で捉えられているのである。

似たような語られ方は、『平家物語』巻九「小宰相身投」で、平通盛と小宰相局のなれそめを語るエピソードの中にも見える。三年間も通盛の文に返事をしない小宰相を、上西門院は「あまりに人の心づよきもなか／＼あたとなる物を」と論じ、次のように小野小町を引き合いに出す。

中比、小野小町とて、みめかたち世にすぐれ、なさけのみちありがたかりしかば、見る人、聞くもの、肝たましゐをいたましめずといふ事なし。されども心づよき名をやとりたりけん、はてには人の思ひのつもりとて、風をふせくたよりもなく、雨をもらさぬわざもなし。やどにくもらぬ月ほしを、涙にうかべ、野べのわかな、沢のねせりをつみてこそ、つゆの命をば過ぐしけれ。(『覚一本』による)

ここでは、若い女性に対する啓蒙、ないしは警告として小町説話が利用されており、人々に与えた影響の大きさがうかがわれる。まさに、片桐洋一氏のいう「衰老落魄」と「美人驕慢」の結合であり、『古今著聞集』で指摘した三点のポイントは、

ほぼ同じ位相のもとに、能(卒都婆小町)に流れ込んでいく。

三、説話から能(卒都婆小町)へ

〈卒都婆小町〉は観阿弥原作・世阿弥改作、〈通小町〉は唱導師の原作に観阿弥と世阿弥が手を入れたと世阿弥伝書に言う³⁾。古作を改訂した多層的性格を有する両曲は、成立年代が近接するばかりでなく、「百夜通い」モチーフを共有することもあって、世阿弥改作以前の古態を推測しつつ相互関係を考察する研究がこれまで積み重ねられてきた。以下では、必要な場合を除いて改作問題には深入りせず、現存の(おそらく)世阿弥による決定稿を対象とし、両曲の関係についても小町説話の摂取という観点から考えてみたい。

はじめに〈卒都婆小町〉のストーリー展開を番号を付して示しておこう。

- ①高野山出身の僧(ワキ・ワキツレ)が都へ上る道筋に、一人の老婆(シテ)がやってきて、朽ちた卒都婆に腰掛ける。
- ②僧が、卒都婆は仏体そのものであるから退けと咎めると、老婆は理路整然と反論しはじめ、完膚無きまでに僧を論破する(卒都婆問答)。

③老婆は小野小町の成れる果てであつた。かつての美貌に引き替えた現在の零落ぶりに僧は驚きを隠せない。

④突然小町の様子が変わる。昔、小町に深く思いを寄せた深草少将の死霊が取り憑いたのである。九十九夜通い詰めたものの思いを逃げることなく急死した「百夜通い」の有様を、少

將の靈は小町の体を通して僧に見せる。

⑤ 狂いさめた小町は、仏法に帰依して悟りの道に入ることを願う。

右は概ね『玉造小町子杜衰書』(A)、「弘法大師小町教化説話」(B)、「深草の四位少将百夜通」(C)の先行説話をもとに構成されている。Aは、①のシテ登場段と③の老女の描写などに本文を引用するので直接関係が明らかだが、それだけでなく、「僧が街路で遭遇した老婆の半生を聞く」という同書の構想を、そのまま一曲の枠組みとして応用したものである。最終場面の⑤を「これにつけても後の世を、願ふぞまことなりける。沙を塔と重ねて、黄金の膚こまやかに、花を仏に手向けつつ、悟りの道に入らうよ」(キリ)と結ぶ点は、『玉造小町子杜衰書』末尾で老女が、「如かじ、仏道に帰して、死後の徳を播さむと欲ふには。：：仰ぎ願くは諸仏、必ず孤身を導きたまへ」(栃尾武校注、岩波文庫所収本文の書き下し文による)と仏道帰依を願う内容と響き合う。また、シテが登場して最初に発する言葉「身は浮草を誘ふ水、身は浮草を誘ふ水、なきこそ悲しかりけれ」(次第)は、『古今著聞集』で確認したように、「小町零落の歌」をアレンジしたもので、「いまはもう、浮き草のよくなわたしを誘ってくれる水さえないのが悲しい」と、さらなる零落を嘆いていることになる。

叙述の関係上、先にCについて述べよう。「百夜通い」説話(百夜通えば逢おうと言われた男が、女の元に通うが、百夜目に行けなくなる)は、男女の人物を特定しない形で、藤原清輔の『奥義抄』をはじめとする歌学書に散見し、これを題材に詠

んだ歌も少なくない。ただし、この男女を四位の少将と小町に特定する文献は能以前に存在が知られておらず、唱導師による原作(通小町)においてはじめて導入したかと推測されている。小町の恋の相手には、在原業平・文屋康秀・大江惟章等が比定されることはあっても、どちらかというところとしており、特定の物語も形成されていなかったらしいから、小町の驕慢、男性拒否を示すエピソードとして「百夜通い」は恰好の物語であったと思われる。時代的にはやや下るが、御伽草子「和泉式部」に、「小野小町は、若盛りの姿よきによりて、人に恋ひられて、その怨念のとげざれば、無量の咎によりて、その因果のがれず、つひに小町、四位の少将思ひ離れず：：」(小学館「日本古典文学全書」所収本文による)と記すことも参考になる。(通小町)でも(卒都婆小町)でも、結果的に少将を死に至らしめたために、小町は恨みを買ひ、崇られる。④の本文を見よう。「小町といふ人は、あまりに色が深うて、あなたの玉章こなたの文：：虚言なりとも、一度の返事もなうて、今百年になるが報うて：：」「小町に心をかけし人は多き中にも、ことに思ひ深草の四位の少将の、恨みの数のめぐり来て：：」とあるように、あらゆる男性を拒否した報いとして百歳になったいま、四位の少将の恨みが襲ってくるのである。話が具体的になっただけで、文脈としては先述した『古今著聞集』や『平家物語』と同一と考えてよからう。以上検討したように、A・Cに関しては、従来の小町説話や小町像に寄り添った撰取とアレンジがなされていることがわかる。

それに対してBの場合は、説話からの飛躍が注目される。こ

は、比較的近年報告された小町関係説話で、Aから派生したバリエーションと称すべき内容を持つている。鎌倉末・南北朝成立、九州大学図書館蔵『古今和歌集序秘注』所収の説話や、智積院蔵『日本記』所収の説話などが紹介されているが、ともに、古卒都婆に腰掛けた老女小町を弘法大師が教化する点、能の「極楽の内ならばこそ悪しからめ、そとは何かは、くるしかるべき」に類する戯れ歌（語句は小異）を小町が詠む点、「卒都婆問答」と極めて関係が深い。小林健二氏は、同説話で「大師が小町に戒を授ける」ことに注意を促し、能（卒都婆小町）の説話的背景に、天台僧が関与したと推測されるこの種の「小町教化譚」が存在したことを指摘したうえで、「しかし、能の作者の構想は、この説話に支配されることはなかった。説話の世界では、大師が小町を教化することに眼目があったのであるが、『卒都婆小町』では、教化する側であるはずの高僧が逆に論破され、その上で小町が『極楽の内』の戯歌を詠む、というところに義理能としての対話劇の面白さが見い出せるのであり、そこに作者としての観阿弥の面目があったのである」と結論づけている。

「弘法大師小町教化説話」は「卒都婆問答」に骨子を提供したと推測されるが、「宗論」に類する機知あふれる言葉の応酬や、教化されるはずの小町が逆に僧をやりこめてしまう着想は、能作者の創案なのだろう。そして、この箇所は、従来の小町伝説から遊離するだけでなく、「因果応報に苦しむ小町が仏道を願う」（卒都婆小町）全体の構想からみても異質である。実は、ここは観阿弥作のままではなく、世阿弥による改訂が施されて

いるらしい。改訂の規模については、部分的な語句の増補とする立場から、「卒都婆問答」全体を世阿弥改訂と見る立場まで幅広く、決め手を欠くが、異質な理由は改訂が関係している可能性もあろう。

仮に「卒都婆問答」が説話の如く弘法大師の小町教化で終わっていたとすれば、（卒都婆小町）の魅力は半減するだろう。無知な乞食と見えた老婆が、教学にとられない本物の知恵を体現していたという逆転、外見と内面のギャップがこの段のポイントである。この場の小町は、落ちぶれてはいても頭の回転が早く、機知に富み、気骨と尊厳を失わない魅力的な女として、能の女性像の中でも異彩を放っている。これまでの小町説話には描かれることのなかった小町像であり、にもかかわらず、いかにも小町にふさわしいと納得させられてしまう。そのような小町が一転してあさましい物乞いに走ったかと思うと、憑き物に乗っ取られて狂いだし、内面と外面が引き裂かれた人格をさらす。憑き物は、巫女の託宣をはじめ、現実世界でしばしば目にするところであり、能は初期のころからこれを芸能化して演じていた。世阿弥は「女物狂などに、あるひは修羅鬪諍・鬼神などの憑く事、これ、何（より）も悪き事也。憑物の本意をせんとて、女姿にて怒りぬれば、見所似合はず」（風姿花伝・「物学条々」）と否定的だが、憑く側と憑かれる側の落差が大きいほど刺激的なのは事実であって、外見は老婆なのに声音や行動が男性という（卒都婆小町）の様相は、まさに「面白づくの芸能」（同書）として迎えられたのではないだろうか。

以上をまとめると、（卒都婆小町）は、実在の歌人小町から

遊離して中世に広く流布した美人驕慢・衰老落魄説話の基本をカバーする集大成的な内容を備えていることが知られ、小町伝説の本格的舞台化としての意義を持つ。一方、「卒都婆問答」に見たような独自の小町像を付加し、ひとつの像を結んだかと思つと、次には不意打ちのように異なる相貌を見せる、多層的人間として小町を造型している。あたかも、一人の人間の中には、その人の経験したすべてがたたみ込まれており、時を得ればそれらが姿をあらわすともいうかのように、「過去の時間」を内包した老女小町ならではの劇を作り上げることに成功している。

四、〈卒都婆小町〉と〈通小町〉

〈卒都婆小町〉と〈通小町〉は、ちょうど連作のような関係にある。すなわち、百歳の生きている小町が少将の死霊に憑き崇られて仏道を願うところで終了した前者を受けて、後者は、死後地獄に堕ちた小町と、なおも崇り続ける少将とが登場する。二人は罪障懺悔として「百夜通い」を語ることを通じて、ともに成仏を果たす。いわば、〈卒都婆小町〉の続編が〈通小町〉に相当しているのであつて、このように考えると「百夜通い」モチーフを共有する意味が理解しやすいく。

〈通小町〉と関わるもうひとつの小町説話が「あなめ説話」である。放浪の果て、孤独のうちに死んだ小町の髑髏の目から薄が生えて歌を詠じたところ、ある人物が見つけて供養したというのがその概略で、『和歌童蒙抄』・『袋草子』・『江次第』

などの歌学書に記すが、場所、人物名、歌の語句、歌か短連歌唱詠か、夢中に小町があらわれるか、など細部においてはまちである。また、髑髏には言及しないものもあるし、「あなめ説話」自体を伴わない小町説話も少なくない。〈通小町〉の直接的典拠は確定できないが、田口和夫氏が指摘するように、応永末年以降の成立とされる『三国伝記』巻十二第六話「小野小町盛衰事」と共通面が多いと思われ、要点をかいつまって記しておく。

イ、弘法大師は小町の終焉の地を尋ね求め、花薄の穂が招く野原で歌を詠む。

ロ、「秋風ノ吹ニ付テモアナメアナメ小野トハ云ハジ薄キ生タリ」と歌を詠じる声を探したところ、「白ク曝タル髑髏ノ眼ノ穴ヨリ薄生。貫テ有ケルガ詠」ていた。

ハ、大師は、白骨を高野山に収めて、小町を弔った。

ニ、小町は、「天生ノ得リ果」(天上界に生まれる果報を得た)能との直接関係は不明ながら、ここでは、僧の供養を受けた小町が仏果を得ている点に注目される。

あらためて〈通小町〉の概略を述べよう。

所は、京都八瀬の山里、夏安居の僧の元へ毎日本の実・爪木を運んで供養する姥がいる。僧が名を尋ねると、「己とは言はじ、薄生ひたる市原野辺に住む姥ぞ、跡弔ひ給へ」と言つて、かき消すように消える(中入)。僧は、市原野で小野小町が「秋風の吹くにつけてもあなめあなめ小野とはいはじ薄生ひけり」と詠んだ古事を思い出し、市原野へ出向いて小町の霊を弔う。すると、小町の後ろから怨霊姿

の四位の少将が出現し、戒を授かろうとする小町を引き留め、続いて「百夜通い」の物まねを語りみせ、成仏へ至る。「亡霊の歌に導かれて、僧が小町終焉の場を訪れ、供養する」という全体の構想が「あなめ説話」に依拠しているのは明らかであろう。単純化すれば、「あなめ説話」と「百夜通い」の取り合わせである。

ところで、〈通小町〉の主人公は四位の少将であり、「煩惱の犬となつて、打たれると離れじ」と、仏法の救いを拒絶してまで女に恋着する男の迷妄を生々しく描き出すのが主眼である。それに対する小町は「男を拒絶する女」として造型されており、それは死後まで持ちこされている。「人の心は白雲の、われは曇らじ心の月、出でてお僧に弔はれん」（少将の心がどうだかは知らない。わたしの心は満月のように澄んでいる。さあ、出て行つてお僧の弔いを受けよう）と、少将を振り切ろうとし、「百夜通い」の段では「もとよりわれは白雲の、かかる迷ひのありけるとは」（少将にこれほどの迷いがあるうとは、わたしは思いもよらなかつた）と冷淡な心を隠さない。恋愛の当事者である男女二人の霊が妄執の過去を再現する（船橋）・（錦木）などと比較すると、男の執心の激しさにおいても、女の冷たさにおいても、〈通小町〉に匹敵する作品はみあたらないだろう。唱導師原作の面影が反映した結果ではあろうが、小町説話で育まれた「拒絶する小町」像が影響を与え、個性的な女人を生み出すことになつたと推測する^⑩。

しかし、これほどの執心を示しながら、成仏はやや唐突に訪れる。

雪の夜も雨の夜も九十九夜まで通い詰めた末、ついに逢う日が訪れた時、少将は、ふと仏が戒めた「飲酒戒」を保とうと思ふ。その「一念の悟り」により、「多くの罪を滅して、小野の小町も少将も、ともに仏道成りにけり」と結ばれるのである。少将が百夜目に死んだことが述べられないことに加えて、あまりに成仏があつけないために、ここに何らかの省略か改訂が施されているのではないかと意見がある。筆者も、長らくそう考えていたが、このままで解釈は可能だと思ひ至つた。二人は、生前の一回きりの百夜通いを、「霊になつた今、僧の前で、もう一度」行っている。演じているうち、少将の心にふと生じた「飲酒戒を保とう」との気持ちだが、仏道への機縁となつたといふことだろう。生前の百夜通いでは死んでしまつた少将ではあるが、死後における百夜通いの中で、ようやく成仏を果たすのである。ほんのささいな善行が悟りを導くというパターンは仏教説話の常套でもあつて、むしろ広大無辺な仏の慈悲をあかすものである。唱導師原作の〈通小町〉にふさわしい結末とみるべきではないだろうか。「あなめ説話」の中では、数少なく、まさにほど明確には描かれてこなかつた「小町の成仏」をテーマに据え、小町を地獄から救済したところに、〈通小町〉の新しさがあると思ふ^⑪。

古作能（卒都婆小町）・〈通小町〉における小町説話の撰取方法と、能があらたに付け加えた小町像について述べた。二つの作品は、大筋においては従来の小町説話を大幅に逸脱するものではなく、説話全体の枠組みに説話を応用し、「男を拒絶する

小町」を肉付けして、劇的演技を導き出している。引用する小町作の和歌が各々一首しかなく、そのいずれもが小町零落譚の中で用いられていることにも、説話との密着度がうかがわれる。〈卒都婆小町〉と〈通小町〉は前編・後編の如く響き合って「小町説話の舞台化」を果たしたのである。

注

(1) 1975年、笠間書院刊

(2) 1989年、日本エディタースクール出版部刊

(3) 『申楽談義』に次の記事がある。

○小町、……四位の少将、以上観阿作。

○四位の少将は、根本、山徒に唱導の有しが書きて、今春権守多武嶺にてせしを、後書き直されしと也。

○小町、昔は長き能也。「漕ぎゆく」人はたれやらん」と云て、なをく謡ひし也。後は、其あたりに玉津島の御座有とて、幣帛を捧げければ、御先と成て出現有体也。……当世、是を略す。

(4) 石川透「小野小町説話の一端」。「むろまち」第二集。1993年・12月

(5) 牧野和夫・石井行雄「室町時代以前成立『日本記』管見——智積院藏本を中心に——」。「実践女子大学文学部紀要」31集。1988年

(6) 「弘法大師教化説話と能〈卒都婆小町〉」。「解釈と鑑賞」1994年・11月

(7) 天野文雄氏は「卒都婆問答」に禅的主張が込められているこ

とを指摘し、〈卒都婆小町〉の構想を「老残の小町によって体現される因果応報」と「逆縁なりと浮かむべし」という禅的主張が「同等の重さを持っている」作品とする。(世阿弥がいた場所)ベリかん社、2007年所収「義満の禅的環境」と〈卒都婆小町〉)

(8) 出雲路修「秋風のふくたびごとに——小野小町説話考——」。「国語国文」550号。1980年・6月

(9) 「能・狂言研究——中世文芸論考——」三弥井書店、1997年所収「三国伝記と小町物」

(10) この点は、拙考「通小町——演出とその歴史——」(『観世』2004・6)で述べた。

(11) 〈通小町〉における成仏の意味については、西村聡「宗教劇から人間劇へ——鬼を救い生を語る能の流れ——」(『解釈と鑑賞』2009年・10月)がある。

【付記】謡曲の引用は、小学館「日本古典文学全集」『謡曲集』(2)による。世阿弥伝書の引用は、岩波書店「日本思想体系」『世阿弥 禅竹』による。

(おだ さちこ・明治学院大学非常勤講師)